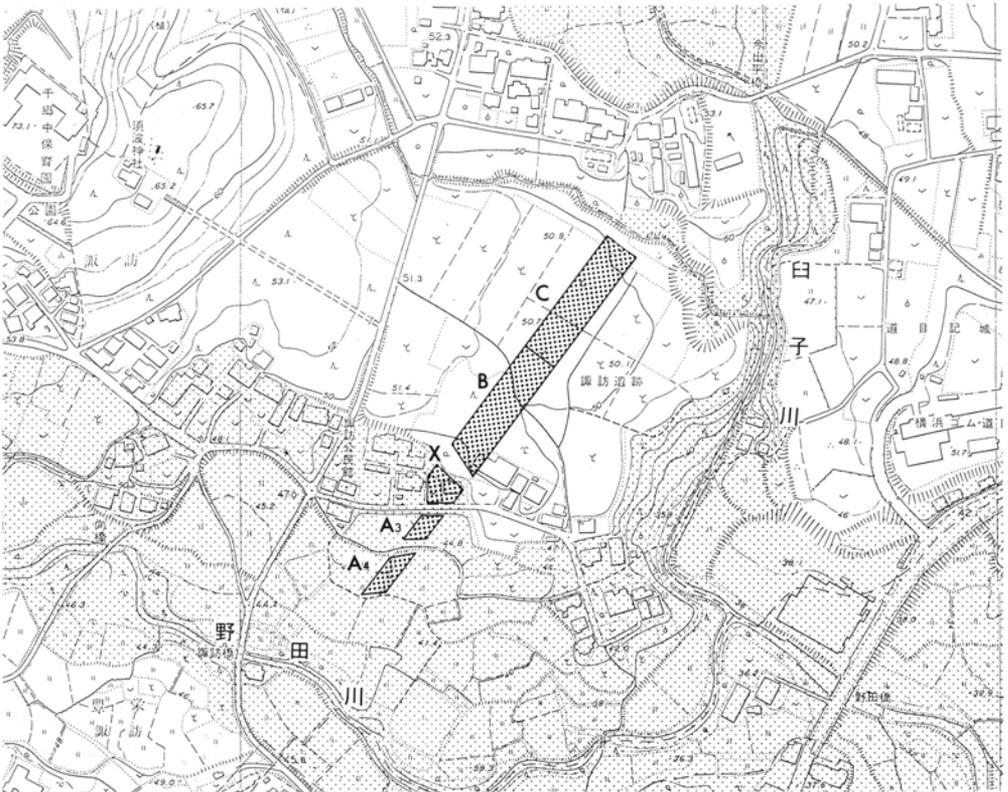


諏訪遺跡

1. 調査の経過

諏訪遺跡は、豊川中流域である新城地域の右岸に発達する河岸段丘の中位面に立地し、標高約50mを測る。位置する段丘は、幅300mほどの舌状をなし、白子川の小支流がはいり込むが、平坦な地形である。段丘南側は、低位段丘面と比高差3～4mの崖面を形成し、豊川支流の野田川まで階段状の水田によって高度を下げる。北側も数mの崖面をなすが、白子川の流れる低位段丘面は緩傾斜である。北西方向は同じ中位段丘が広がり、西方向は高位段丘となる。東側は、比高差10数mから20mの白子川の河谷であり、対岸の段丘上には道目記城跡がある。なお、杉山遺跡は白子川をはきんで、北東方向に位置する。

諏訪遺跡は、昭和30年代には遺物散布地として認識され、文化庁編集の全国遺跡地図に記載されている。当初、範囲は中位段丘上とされていたようであるが、事前調査の遺物分布の状況から、中位段丘面にB・C区、低位段丘上位面にX・A3、同中位面にA4区の調査区を設定した。(第1図)



第1図 諏訪遺跡調査区位置図 1/5000

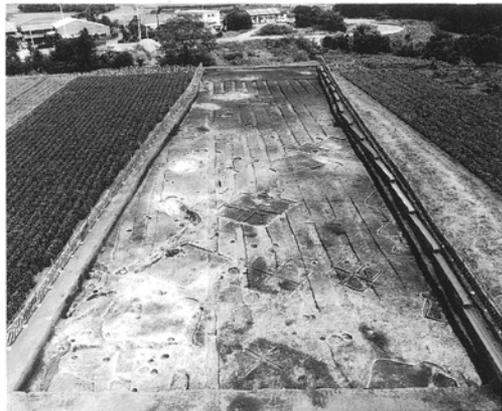
2. 調査の概要

検出された遺構・遺物群は、Ⅰ期：縄文時代 Ⅱ期：弥生時代後期 Ⅲ期：奈良時代～平安時代前期 Ⅳ期：近世の4時期に大別される。以下各時期について概略を述べる。また、各調査区の基本層序については、B・C区 耕作土→黒色土（いわゆる黒ボク）→黄褐色土、X・A3区 耕作土→黒色土→砂礫土 A4区の現耕作土下は水田造成による堆積土であり、過去の水田面が幾層か認められ、層序は一定していないが、基盤は砂礫土である。

Ⅰ期 B区で土坑が1基検出され、内部から中期の同一個体の土器が出土した。諏訪遺跡全体でも、遺物出土量は少量で、遺構も希薄である。

Ⅱ期 後期の竪穴住居9軒・方形周溝墓2基・溝2条・大型土坑3基などが検出された。X区の溝1条、A3区の若干のピット・土坑以外はB・C区である。竪穴住居は後期前半（山中期並行）5軒、後期後半（欠山期）3軒・時期不明一軒である。後期後半の住居跡と後半の

1軒は、B区SD04と、B区とX区の境の中位段丘崖との間に位置し、SD04以北には後半の2軒がある。遺構・遺物の遺存状況は、前半・後半各1軒以外はあまり良好でない。SD04は、西壁面で幅1.5m×深さ0.9mを測り、断面V字型である。X区SD01も東壁面で幅2.3m×深さ1.4mのV字型で、両溝の上層部より後期後半の土器が多量に検出された。SD01・04の断面形状・遺物出土状況は近似しており、同時に掘削され、同過程を経て埋没したと考えられる。方形周溝墓2基は、SD04の北側にある。SZ01は、1ヶ所には陸橋があり、SZ02は「コ」の字形で2ヶ所の陸橋部をもつ形状である。マウンドはいずれも不明である。この時期の遺構は全体として、SD04以南に密である。なお、中期の遺物がA4区の旧自然河道部より少量検出されている。



C区 全景(南より)



B区 全景(北より)

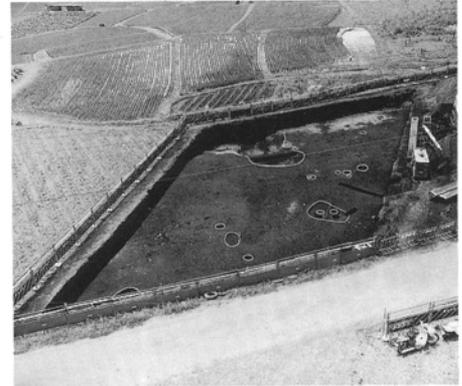
Ⅲ期 9世紀前半を中心とする時期の竪穴住居37軒、掘立柱建物10棟などが検出された。竪穴住居はB・C区の北部は分布が希薄であるが、その全体にわたってある程度の群構成を示しながら分布している。長辺は2m～7m、明確な柱穴を有するものはなく、無柱穴の可能性もある。竈は、検出されたものでは北辺あるいは東辺中央にあり、構造は石組を有するものが2軒ある。遺構の状況が良くないため、住居址内の一括した遺物は多くはないが、須恵器蓋杯と土師器の甕類の編年的な関係を推定させる資料がある。掘立柱建物は竪穴住居群内の空間地を占める形で位置し、軸方向に統一性があることなどから竪穴住居に時期的に対応すると考えられる。3間×2間、3間×3間の規格のものが多く、後者は倉庫の可能性もある。竪穴住居・掘立柱建物は、3時期程度に識別されるが、切り合い関係は少ない。また、X区から竪穴住居3軒が検出されており、低位段丘上位面にも居住域が広がることが確認されている。なお、平安時代中期の灰釉陶器も検出されているが遺構は希薄である。

Ⅳ期 B区で方形土坑1基が検出され、土師器皿、鉄釉陶器類が出土している。墓坑の可能性はある。

その他の時期：古墳時代の須恵器、14世紀代の陶器類がA4区の遺物包含層中に、少量検出されている。時期不明の遺構としては、C区北半に大型土坑7基と、A4区南に溝2条がある。土坑は最大のもので、平面4.8m×3.5mの楕円形で、深さ約1.5m、出土遺物はほとんどなく、埋土は掘り下げた土が一方から流入しているという共通した様相を示し、中世以降の遺構と考えられる。A4区の溝は、伴う遺物がなく、現在の水田の造成以前の水田の用水路と推測される。



X区 全景(南より)



A3区 全景(北より)



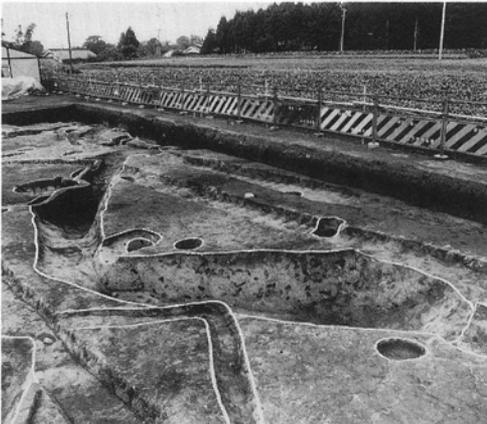
A4区 全景(北より)

3. まとめ

弥生時代集落構造：中位段丘上と、その段丘崖下に後期前半に掘削された溝が検出され、その間の区域に当該時期の竪穴住居が存在することから、2つの溝は居住域の外縁を画す溝と考えられる。B区SD04は、ほぼ直線方向に伸び、白子川の河谷が形成する段丘崖の屈曲部に至って居住域の北側を画す。X区SD01は、段丘崖直下より数m隔てて並行していることから、裾部をやはり白子川河谷まで廻り、南側を画すものと推定される。しかし、集落の防御上の観点から両溝が河谷の付近で結合するかは不明である。居住域の西側については、段丘崖が西方向に連続するため、SD01がある程度の所で断絶し、SD04がその部分に向かって方向を転換して、居住域を画すように廻ると推測される。以上の推定から、居住域の範囲は南北約120m、東西100m以上となる。また、SD04の北側居住域外に方形周溝墓が検出されているが、これより西の地域に対応する墓域が形成されているものと予想される。段丘上の突出部という防御に適した自然地形を利用して居住域が形成され、利用価値が低かったと考えられる中央部に墓域が設定されている。

また、農耕地、特に水田の位置は推測の材料はないが、居住域の南と東側は傾斜地で水田造成することは困難と考えられ、若干距離を隔てるが、北側の白子川流域の平坦な低位段丘面などに存在したものと推定される。

奈良～平安時代前期の集落：この時期の住居等は段丘の南半を中心に広がると予想される。調査区内において、竪穴住居と掘立柱建物との配置は計画性が認められ、9世紀前半を中心とする短期間に存続し廃絶することから、自然村落とは性格的に異なるものと考えられる。平安時代前半の人口増加による東三河地域の郡郷の改変に見られるような現象が、集落の構成に何らかの影響を与え、このような形で現れたと思われるが、この問題については今後の検討課題である。



C区 SZ01 東側より



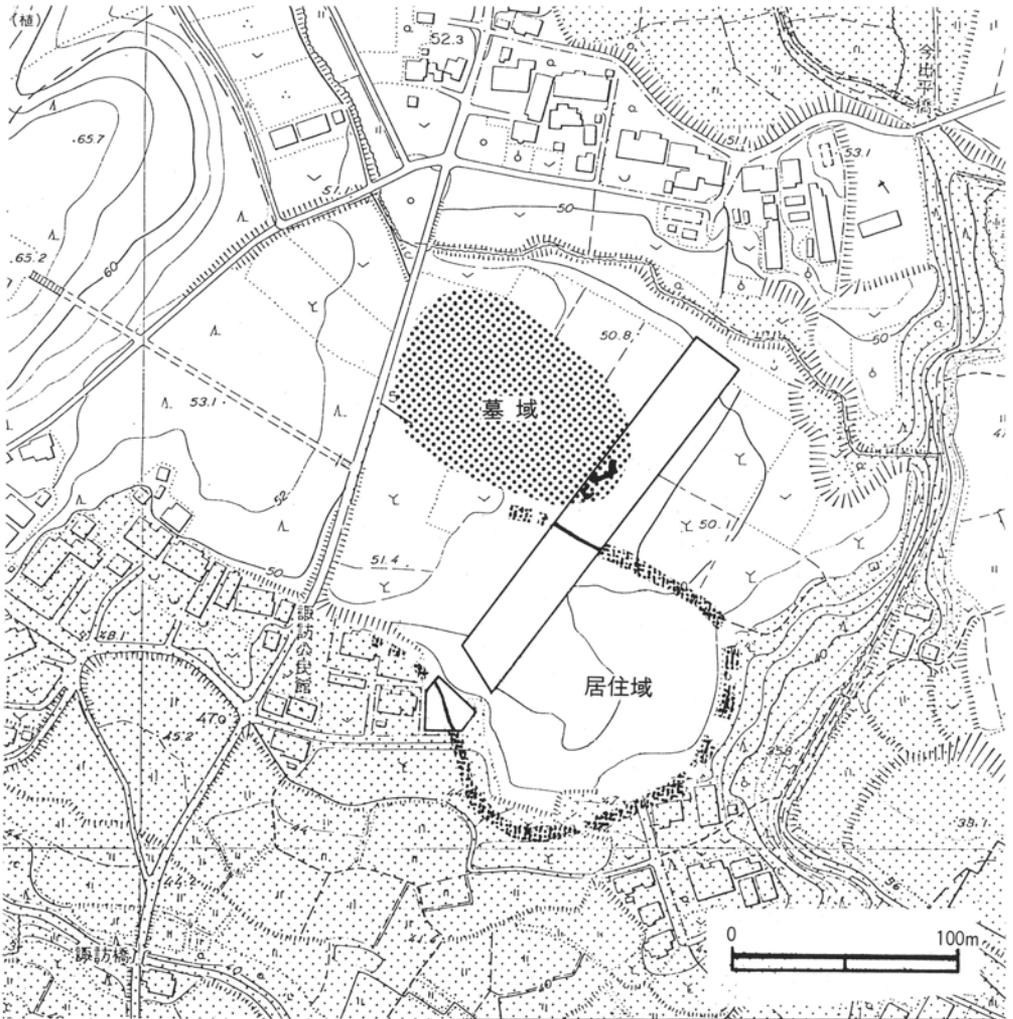
弥生時代後期竪穴住居遺物出土状況



B区 SD04 遺物出土状況(西より)



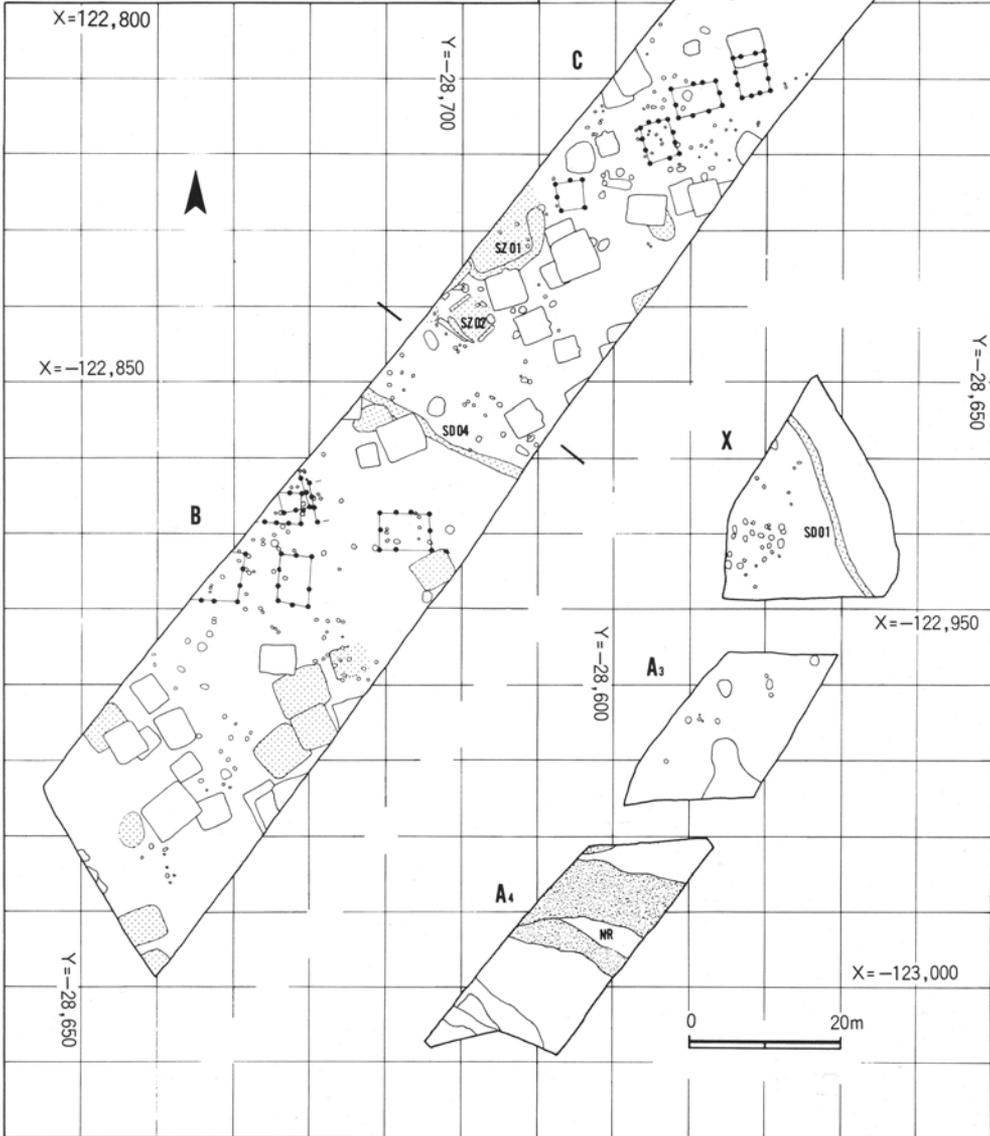
X区 SD01(東より)



第2図 諏訪遺跡、弥生時代集落概念図 約1/3333



X・B・C区 全 景 (南より)



第3図 諏訪遺跡遺構配置図 1/1000